

# 金田一は出てこない

かねてより、横溝正史も短篇には有名長篇よりも短篇に傾倒していた。そしてついに今年『横溝正史ミステリ短篇コレクション全6巻』が刊行された。初期のものが没後発掘された作品、単行本未収録のエッセイまでバラエティに富んだエッセイを読める垂涎もののコレクション。若き日のまだ小説ならざる作品もユーモアやクイズといった編集者らしさが垣間見えるものも

『横溝正史ミステリ短篇コレクション』  
横溝正史 著  
横溝正房 著  
横溝各 著  
2600 円



御一興。  
個人的には初出時の表現そのままの古い文に魅了される。読めば読むほど昭和初期の世情や匂いに包まれる。その中毒性は夢うつつと分かつていても逃れられない。

それは装丁にも及んでいて全6冊の表紙を並べると横溝正史的横たわる女性のイラストが完成する仕掛け。微に入り細を穿つ。「揃えた!!」フアンの心鷲掴みである。至福をいただきたい。



横溝正史

『ガラスバードは還らない』  
市川憂人 著  
東京創元社 1900 円



そして、  
誰もいなくなつた

『ジェリーフィッシュ』を受賞して衝撃のデビューを飾った著者の三作目。二作目『ブルーローズは眠らない』は密室モノ

だった。が今作は再び閉鎖空間を舞台に連続殺人がおき、最後には容疑者が全員……。そして誰もいなくなつた。『オマージュ』となつていく。フェアかといわれれば微妙なところであるが、そもそも作者は一作目が『十角館の殺人』との類似性を指摘されていようと、どちらかというよりは「純本格派」というあり、驚嘆が主であつて論理は副次的な……。即ちアガサ・クリスティー・フォロワーであるのだから当然といえは当然である。その点は同世代の青崎有吾(代表作『体育館の殺人』)が論理を主としたエ

ラリー・クイーン・フォロワーとして活躍しているのと対称的でおもしろい。話を今作に戻すと、超高層ビルの最上階という大掛かりな舞台設定とい、硝子鳥という幻想的なアイテムとい、新本格ミステリーファンならば垂涎モノのガジェット盛りだくさんで満足すること請け合ひである。すでに次作が待ち遠しくてしようがない。



## ウチナンチュから見る沖繩

沖繩と聞いて私たちが最初にイメージするものは何だろうか。また普段私たちが生活している中で、内地の人々やマナンチュと沖繩の人々やチナンチュを意識する機会はどれほどあるだろうか。著者岸政彦は社会学者の立場から「戦後沖繩の社会構造とアイデンティティの変化」について沖繩の人々の話に耳を傾け続けている。それは「ヤマトンチュ」である著者自身が、それでもなお日本の中の独特で特別な場所として、切実に沖繩論を語りたい一心からである。

## 本は読者のもの

子どもの頃からの本好きが高じて書店員となつた。だが、本屋に勤めていた自分の読書体験がいかにかつ出版不況と言われながら日々奔走する毎日。どこに並べたら売れるか。どこに並べたら売れるか。どこの本も目利きを自負しながら客目利きから問いかけていく。本は読者のもの。であり感じさせられる。

## この原稿もアウトプットの成果

仕事柄、数多くのビジネス書の最新刊に触れる機会があります。まれに、タイトルの見えて「ああ、こういうのを求めていた」とピンと来る本に出

そこには描かれていない。ごく普通の沖繩に住む人々の語りである。だが、ただそれだけで私たちがマナンチュには沖繩を特別な場所と思わせるほどの力があるのだ。観光だけではない沖繩を知るきっかけとなつた一冊。

会うことがありません。そして、中身に軽く目を通し、自分の直感が正しかつたことが分かります。実際その本が店頭で売れていくのを見て、お客様に自分のセンスを鍛えられた感じになります。私が推奨したい今年のビジネス書のベストは「学びを結果に変えるアウトプット大全」です。これまでビジネス書を何冊も読んできたけど、応用しきれない方、今一つ何か役立ってないと感じられる方、学んできたことが体系的に整理できていないという方におすすです。いろいろ腑に落ちること間違いなし。

「本を贈る」はそのタイトル通り、届ける十人による小論集。編集者、装丁家、校正者、取次、本屋等、「本・仕事」について、それぞれの立ち位置で書かれています。「皆が皆、本好き、読書家ばかりではない」の根拠が、とは言い、やはり根底には「本」が特別であり普通でもあり続けて欲しいという思いがこめられていく。私がこの本を手にした理由。なにより装丁が美しい。そして驚くほど軽い。もはや感動としか言いようがない。